

チャガタイ文学とイラン的伝統

菅原睦

0 はじめに

十世紀に始まるとされる中央アジア・チュルク系住民のイスラーム化は、言語・文学の面ではアラビア文字で書かれるいわゆる中期チュルク語の出現と、それを用いたチュルク（トルコ）・イスラーム文学の成立をもたらした。以後、中期チュルク語による文学活動は時代により中心地を変えながら展開していくが、十五世紀においてティムール朝の繁栄を背景にチャガタイ文学としてその頂点を迎える。

ところで、中期チュルク語の出現からチャガタイ文学の確立に至る過程は、同時にまた先進文化であるイラン（ペルシア）文化の受容の過程でもあった。そこで本稿では、チャガタイ文学において外来のイラン的要素と固有のチュルク的要素とがどのような関係にあったのかを、主として作品の形式や題材といった面から検討してみたい。考察の対象として取り上げるのはチャガタイ文学を代表する文人であるアリー・シール・ナヴァーイー（一四四一—一五〇一）の作品であるが、比較のためにまずチュルク・イスラーム文学の初期の作品である『クタドウグ・ビリグ』（十一世紀）について触れておきたい。

1 『クタドウグ・ビリグ』において

チュルク・イスラーム文学の現存する最古の作品である『クタドウグ・ビリグ』*Qutadgu Bilig* は、大侍従ユースフ *Yusuf Ulug Xasr Hajib* により一〇六九／七〇年に完成された教訓的な内容の長編詩である。作品ジャンルとしてはいわゆる君主鑑文学 (*minor for princes*) に属する。形式面では、約半世紀前にペルシア語で書かれたフェルドウスィーの『王書』（一〇一〇年完成）と同じく、ムタカーリブの韻律によるマスナヴィーの形式¹によつて書かれており、また冒頭に神・預言者ムハンマド・四人の教友への賛辞が置かれている。このようにジャンル・形式の両面において、この作品がペルシア文学・イスラーム文学の強い影響を受けていることは明らかである。その一方で、この作品には約二百篇の箴言的な性格をもつ「四行詩」が引用という形で組み込まれている。これらは一部の例外を除き、押韻のパターンの点で作品の本体をなす部分とは異なっている。即ち作品の本体では十一音節から成る半句が二つづつ a a、b b、c c のように押韻するのに対して、四行詩の部分では十一音節の半句四つが a a b a 型の押韻を示すのが一般的である。²

mungar mängezüti aydı şa'ir sözi / uqup tınglayu al kisi ärbüzi:

sävıgılı kışınıng yüzi bälğülüg / rılı açsa ma'nâ sözi bälğülüg

sävâr sävmäzin öz biläyin *tesäi* / sangâ tärüti bağsa közi bälğülüg

「これをたとえて詩人も言っている。

よく聴いて理解する

がよい、人々の虎よ。

『恋する者は顔でわかる。

口を開けば言葉でわかる。

好きかそうでないか知ろうと言うなら、

お前を見つめるその目でわかる。』(QB 1900-1902)

従って『クタドウグ・ビリグ』は、厳密に言えばペルシア文学の代表的な形式であるマズナヴィーと、それとは異質の形式である四行詩とを混ぜ合わせた形式で書かれているものである。a a b a型の押韻が直ちにこれら四行詩のチュルク起源と結びつくとは必ずしも言えないが、ここでいくつか考慮すべき点を指摘することができ。

1 『クタドウグ・ビリグ』には四行詩以外に、マズナヴィー形式の枠内でも多くの引用が組み込まれている。それらの中には「チュルクのハーン」(türk xanı 3817)、「オテケケンのベグ」(Ötükän bəgi 1962, 2682)といったチュルク的な称号で呼ばれる人物の言葉として作品中に導入されているものが見られる。

2 同様に「チュルク語の諺」(türkçä masal)として引用さ

れている詩句が見られる(319, 880, 1798, 1826)。

3 一方でアラブ(tazi 5809-10)およびイラン(täzlik 3265)起源と明記されている引用がそれぞれ一例ずつ見られる(前者は四行詩)。このことは、逆にそれ以外の引用がチュルク起源であることを推定させる。

このような状況から判断するならば、『クタドウグ・ビリグ』に引用されている四行詩は、その大部分がチュルク的な伝統に由来するものと考えてよいだろう。

一方でこの作品の全体を通じて、チュルク系諸民族のフォークロアと共通する要素や、古代チュルク語詩(イスラーム時代以前)の伝統とのつながりの存在が指摘されている(Baiktova 1958; Crețuța 1971:74-81, 91-93)。先に触れた歴史・伝説上の人物への言及や諺の引用も、この作品がチュルク的な伝統を踏まえていることをよく示すものである。もちろん著者が「新しい」外来の表現をも積極的に作品に取り入れていることは、「ルーム(ビザンツ)の娘がその顔を地面に隠すと、世界の表面は黒人の顔になった」(3948)といった、当時の中央アジアにあっては異質といえるべき比喩の使用からも明らかである。またダンコフは『クタドウグ・ビリグ』の言語にペルシア語からの翻訳借用(calque)が多く見られることから、モデルとなったペルシア語作品の存在をも示唆している。

このように『クタドウグ・ビリグ』は、ペルシア文学の形式を用いながらもそれに全面的に従ってはおらず、外来の要素と共にチュルク的な伝統に属する要素もまた重要な位置を占めているという、複雑な性格を備えた作品である。こういった二面

性は、この時代における外来の文学の受容のあり方を考える上でまことに興味深いものであり、作品の内容や著者の思想的立場と併せてのより詳しい研究を必要とするものである。ここでは十五世紀チャガタイ文学との比較において特に注目される、トンガ・アルプ・エル Tonga Alp Arなる人物についての言及に触れておきたい。

「これらチュルクの君主たちのうちでも名高いのは、幸に満ちたトンガ・アルプ・エルであった。

高い知識と多くの徳を備え、知性と理解にすぐれた、人々の選良であった。

イラン人(波斯)たちは彼をアフラースイヤーブと呼ぶ。

諸国に攻め入り支配したアフラースイヤーブである。」(QB 277-280)

イランの伝承において「イランにとって最大の敵、脅威的(黒柳 1989:240)とされているトウラーンの王アフラースイヤーブが、トンガ・アルプ・エルというチュルク語の名をもつチュルクの君主であったという考えは、チュルクの伝承をイランの伝承の中に組み入れる形で両者を一体化したものである。全く同じ立場は「クタドウグ・ピリグ」と同時代にマフムード・アル・カーシユガリー Maḥmūd al-Kāshgari によって編纂されたチュルク語辞書 (*Diwān luġat al-turk*)にも共通して見られ、これが当時の一般的な理解であったことが窺える。しかし後述するように、十五世紀チャガタイ文学においてはこれと大きく異なるアフラースイヤーブ像を見出すことができるのである。

2 ナヴァアーイーの作品において

2・1 作品ジャンルと題材

ミール・アリーシール・ナヴァアーイー(一四四一―一五〇二)はティムール朝末期の君主スルターン・フサインのヘラートの宮廷に仕えた詩人である。後世「チャガタイ文学の確立者」として知られるナヴァアーイーのチャガタイ語による作品は次の通りである。

ナヴァアーイーの作品

〈叙事詩〉

五部作

- 一 『篤信家たちの驚嘆』 *Hayrat al-abrār*
- 二 『ファルハードとシーリーン』 *Farhad u Šrīn*
- 三 『ライラーとマジヌーン』 *Laylā u Majnūn*
- 四 『七つの遊星』 *Sab‘a-i-Sayyara*
- 五 『イスカンドルの城壁』 *Sadd-i-Iskandari*
- 六 『鳥の言葉』 *Lisān al-tayr*

〈詩集〉

- 四部詩集 『意味の宝库』 *Xazā’in al-na‘anī*
- 七 『少年時代の不思議』 *Garā’ib al-sigar*

八『青年時代の珍しきもの』Nawādir al-šabāh

九『中年時代の驚き』Badā'i' al-wasat

一〇『老年時代の収穫』Fawā'id al-kibar

(初期の詩集)

一一『初めの驚き』Badā'i' al-bidāya

一二『終わりの珍しきもの』Nawādir al-nihāya

〈その他の作品〉

一三『友愛のそよ風』Nasā'im al-mahabbā min šamā'im al-futuwwa

一四『のハディース』Āḥil hadīs

一五『宝石の一聯』Nazm al-jawāhir

一六『名士たちの集り』Majālis al-nafā'is

一七『サィド・ハサン・アルタミール伝』Ḥalāt-i Sayyid Hasan Ardas̄ir

一八『勇士ムハンマド伝』Ḥālāt-i Pahlawān Muḥammad

一九『驚きの五部』Xamsat al-mutahayyirin

二〇『諸韻律の天秤』Mizān al-awzān

二一『二つの言語の裁定』Muhākamat al-luġatayn

二二『預言者たちと賢者たちの歴史』Tāriḫ-i anbiyā u ḥukamā

二三『イランの王者たちの歴史』Tāriḫ-i mulūk-i 'Ajam

二四『心に愛されるもの』Mahbub al-qulūb

二五『ムスリムたちの灯火』Sirāḡ al-muslimin

二六『祈祷』Munājāt

二七『書簡集』Munša'āt

二八『ワクフイーヤ』Waqfiya

ペルシア文学の伝統的な題材による五部作(一〜五)及び、

アッターール(一二二一?没)の作品に基づく六については次節で取り上げる。

四部からなる詩集『意味の宝庫』(七〜一〇)の構成、すなわち人生の四つの時期に対応する四つの詩集という発想は、インドのペルシア語詩人アミール・ホスロウ(一二三二没)の先例に倣ったものである。また7の冒頭に置かれた詩がアラビア語の半句で始まることも、ハーフェズ詩集などの伝統を継承したものに他ならない。

一方叙事詩・詩集以外の作品のうち、一三はナヴァアーイーの親しい友人でもあったジャーミー(一四九二没)のペルシア語による『親交の息吹』をチャガタイ語に翻訳・改訂したものである。一四も同じくジャーミーのペルシア語作品からの翻訳である。一五は四代カリフ、アリー1の言葉(とされるもの)をチャガタイ語の韻文に訳したものであるが、その際にペルシア語による同様の韻文訳の先例に倣ったことが記されている(MAT 15, pp.127-128)。従ってこれらは、五部作や『鳥の言葉』と同じくペルシア語による作品をモデルとした作品群として位置づけることができよう。

その他の作品は直接のモデルをもたないと考えられる。一六は主に同時代の詩人・文人の評伝であり、一七・一八は著者ナヴァアーイーにとって身近な人物の追想として書かれたものである。同じく一九もジャーミーへの追憶のために書かれた。二〇はチャガタイ詩の韻律論、二一はよく知られた言語論である。また二八はナヴァアーイーがヘラートで行った種々の慈善活動に関する記録である。これらはいずれも著者ナヴァアーイーが自ら見聞したことから、もしくは著者自身の実践に関わる内容の作

品と言うことができる。これらと対照をなすのが、人類の始祖アダムからムハンマドに至る預言者・聖者たちと古代ギリシャの賢者たちを扱った二二及び、サーサーン朝までの古代イランの歴史・伝承に取材した二三である。ここで注目すべきことに、ナヴァーイーは自分自身あるいは自らが仕えていた君主に直接関わる、チュルクあるいはモンゴルの歴史や伝承を題材とする作品を残していない。言い換えれば、ナヴァーイーが作品化するにあたってその出発点となったのは、身近な見聞に基づく世界か、もしくは伝統的なペルシア・イスラーム文学の世界のいずれかであり、チュルク・モンゴルの歴史や伝承という選択はなかったことになる。このような、自分たちの固有の伝統に対する無関心とも言うべき態度は、六つの叙事詩の特徴を検討することにより一層明らかとなる。

2・2 叙事詩におけるチュルク的要素

ナヴァーイーの六つの長編叙事詩のうち、はじめの五篇は「五部作」を構成する。これらがニザーミー（二〇九年没）やアミール・ホスロウに代表されるペルシア語による「五部作」の伝統によっていることは明らかである。ニザーミーの五部作は『神秘の宝庫』、『ホスロウとシーリーン』、『ライラーとマジヌーン』、『七つの肖像』、『イスカンダルの書』の五つのマスナヴィーから成り、アミール・ホスロウのそれは『光の上昇』、『シーリーンとホスロウ』、『マジヌーンとライラー』、『八つの天国』、『イスカンダルの鏡』から成っている。ナヴァーイーの各作品はそれぞれ対応するペルシア語作品と同じ題材・同じ韻律で書かれてい

る。一方六番目の叙事詩『鳥の言葉』は、上述したようにアッタールの神秘主義的叙事詩『鳥の弁舌』に基づくもので、やはり原作と同じテーマ・同じ韻律が用いられている。これら六つの叙事詩は、形式面でも異質な要素を含まない純粋なマスナヴィーであり、第一章で見た十一世紀の『クタドウグ・ピリグ』に比べて、ペルシア語作品の規範により忠実であると言うことができる。

ナヴァーイーの五部作や『鳥の言葉』といった作品が、ペルシア文学の原作に基づきながらも単なる翻訳・翻案の域を超えて独自の価値を持つ作品となっていることについては、既にベルテリスなどによって論じられており、改めて繰り返す必要はないと考える。ここで問題としたいのは、ナヴァーイーによる「改作」が、ペルシア語による原作にチュルク的な伝統に関わる要素を加えているかどうかという点である。以下三つの事例を取り上げ検討する。

2・2・1 「中国のハーカン」(「ファルハードとシーリーン」)について

五部作の第二作にあたる『ファルハードとシーリーン』は、ニザーミーの原作『ホスロウとシーリーン』においてはむしろ脇役であったファルハードを物語の主人公の位置に引き上げている点に特色がある。さらにこのファルハードは出自において「中国のハーカン」(Xaqan-i Chin)の王子とされている。ベルテリスはこの「中国」が実は東トルキスタンを指すとし、主人公ファルハードをその王子とする設定に著者ナヴァーイーの民族的な立場が現れている²⁾とを指摘した(Beprensic 1965:154,

Berels 1957:127)°ベルテリスのこの見解はレヴェンドやアルパイ
＝テキンによっても受け入れられているものであるが(Levend
1965:10; Fš, p.47)°しかし物語自体の中にこの推定を裏付けるも
のは何もない。そこに描かれているのはごく一般的な君主として
の「中国のハーカーン」であり、ことさらにチュルク的なイメー
ジは見出せないのである。ファルハードを「中国のハーカーン」^{2,3}
の王子とする設定はアミール・ホスロウの創案であるという。ベ
ルテリスは、ナヴァアローが中国の皇帝を指す一般的な称号であ
る「ファグフル」ではなく、よりチュルク的な「ハーカーン」
を用いていることに注目しているが、ナヴァアローはアミール・
ホスロウの作品に言及した箇所においてもやはり「ハーカーン」
の語を用いている(Fš, IX-91)。ここから判断するならばナヴァア
ローは「ハーカーン」の称号の使用が自作を特徴づけるものとは
考えていなかったことになり、仮に「中国のハーカーン」が東ト
ルクスタンのチュルク系君主を意味していたとしても、そこにナ
ヴァアローの特別な意図があったとは言えない。

なお「中国のハーカーン」は『イスカンダルの城壁』において
も重要な登場人物の一人である。やはりベルテリスはこれを東ト
ルクスタンの支配者と解釈する(Berels 1965:400)°この人物
はイスカンダルの物語における重要な要素としてニザーミーやア
ミール・ホスロウの作品にも登場しており、ここにナヴァアロー
の特別な立場の現われを見ることは困難である。また「中国の
ハーカン」という称号をもつ人物が『篤信家たちの驚嘆』の挿話の
一つ(第五七章)に登場するが、そこで描かれているのは単なる
残忍な支配者の一例に過ぎないことを付記しておきたい。

2・2・2 ティムールの逸話(『篤信家たちの驚嘆』)

五部作のうち『篤信家たちの驚嘆』、『七つの遊星』、『イスカ
ンダルの城壁』の三作と、『鳥の言葉』はそれぞれ作品中にいく
つかの独立した挿話を含んでいる。これらの挿話で取り上げら
れている人物の例を以下に挙げる。

『篤信家たちの驚嘆』：バーヤズイード(バスターミー)、イ
ブラーヒーム・アドハム、ハータミ・ターイー、アヌーシル
ヴァーン、イスカンダル、バフラームなど

『七つの遊星』：セイロンの王子、ルームの金細工師、エジプ
トの商人の息子、デリーの王、ホーラズムの楽師など

『イスカンダルの城壁』：マフムード・ガズナヴィー、アルダ
シール、バフラーム、マジユヌーン、ルクマーンなど

『鳥の言葉』：イスカンダル、シャイフ・サンアーン、アダム、
アリストテレスの弟子、スライマーン、マンスール(ハッ
ラージュ)、マジユヌーンなど

一見して明らかのように、挿話の題材もやはりイランの歴史
(アヌーシルヴァーン、バフラーム、アルダシール)、ペルシア
文学の伝統的テーマ(イスカンダル、マジユヌーン)、あるいは
イスラームの聖者や賢者の伝承(バーヤズイード・バスターミー、
イブラーヒーム・アドハム、ルクマーン)といったものを背景
とする場合がほとんどである。例外的にチュルク的な題材が用
いられているものとしては、ティムールのインド遠征を舞台と
する『篤信家たちの驚嘆』第三七章を挙げる事ができるが、

その内容はティムールの人物像と結びついたものとは言えず、そこに描かれているのは一般的な「征服者」の姿に過ぎない。その主人公がティムールである必然性がない証拠に、これと同じモチーフによる挿話が『イスカンダルの城壁』第二章においては、チンギズ・ハーンのホラズム遠征を舞台として述べられているのである。

ティムール以外のティムール家の人物についての言及としては、『イスカンダルの城壁』第二章にスルターン・アブー・サイード（在位一四五二・六九）の逸話が見られる。また挿話ではないが、『ファルハードとシーリーン』第三章にはウルグ・ベグ（在位一四四七・四九）への賛辞が見られる。これらはいずれも著者にとって歴史というよりもむしろ同時代的なできごとであったと考えてよい。その一方でティムール以前の歴史やティムールの出自に関する言及は作品の中に全く見られない。ティムール家の系譜や伝承が当時の支配者や宮廷史家にとって重要な意味をもっていたこと（間野 2001:317-336）を考えるならばこれは注目すべきことである。

2・2・3 ヘラート、サマルカンドの建設（『イスカンダルの城壁』

イスカンダル、すなわちアレキサンダー大王が中央アジアの諸都市を建設したという伝承は古来よく知られたものであった。イスカンダルの生涯を描いた『イスカンダルの城壁』がこの伝承を踏まえ、当時の中央アジアの中心都市であるヘラート（ナヴァーイーの故郷でもあった）やサマルカンドの建設に触れているのはその意味で当然と言える。とは言え、いずれの場合も歴史上のこ

とがらの叙述よりも、むしろ二つの都市の今日の繁栄を讃える華麗な表現が印象的である。

「遊星は7つの天に配され、地上の国々は7つの気候帯に位置する。遊星の中央に輝ける太陽が来るごとく、地上にはホラーサーンの国。」

ホラーサーンは身体、ヘラートはその生命、

ヘラートは生命にしてホラーサーンはその身体。

ああ、大空に太陽ある限り、太陽の光が大空を照らす限り、

この地（ヘラート）に落日なく、住民に大空より不安なきよう！」

(MAT 11, p.237)

「（イスカンダルは）賢者たちと相談し、町を造るのによい場所を探す。

コーハクと呼ばれるその丘こそは、世界の宝への呪文。

小石はルビーや真珠にも似、緑の草はエナメルの大空にも似る。

コーハク河の水は、丘を流れて下る。

その流れる様を見る者は、たとえて言う——『恋する男の顔に一筋の涙』。

そのかたわらに町を建設した、世の亡びが訪れることのないようにと。

イスカンダル、これを名付けてサマルカンドと——天国の如きサマルカンド！」

(MAT 11, p.239)

従って、イスカンダルの事蹟という歴史的な文脈の中に位置付

けられてはいるものの、これらは著者が現在生きている現実の世界に関わる話題としての性格をもつ。逆に言えば、現在のことがらがイスカンダルの物語に舞台を借りて描き出されていると見てよいであろう。

結局、題材の選択という点で考えた場合に、2・1で見たナヴァアーイーの作品全般に認められる傾向は六つの叙事詩に同じように当てはまると言える。すなわち、ペルシア文学の伝統的なテーマ、もしくは著者にとつての身近な世界が、作品化の出発点となるというものである。これに対してチュルクの歴史・伝承といったものは叙事詩の全体や挿話の中でなんら重要な位置を占めていない。ナヴァアーイーは作品の中にことさらに「チュルク的」な要素を盛り込んではいないのである。

2・3 ナヴァアーイーにおける「歴史」

ナヴァアーイーの作品をジャンルおよび題材の面から検討した結果、これらの作品においてイラン的な要素、特に古代のイランに関わる歴史・伝承に対する高い関心に比べて、チュルク的なもの、すなわち自分たちの歴史や伝承に対する関心の低さが明らかになった。これは第1章で見た「クタドゥグ・ビリグ」が、「チュルクのハーン」や「オテユケンのベグ」といった人物への言及などを通じてチュルク的な伝統とのつながりを示していたのと対照的である。

ナヴァアーイーにおける、このような固有の伝統に対するほとんど無関心と言ってよい態度は何を意味するのであるか。

先に第1章では、十一世紀においてアフラーシヤープ

ルクの支配者トンガ・アルプ・エルという伝承が知られていたことを示した。この伝承の反映は、知る限りナヴァアーイーの作品中には見出されない。それどころか、ナヴァアーイーにおけるアフラーシヤープ像はイラン側の立場からのそれに他ならないのである。

「(アフラーシヤープは)イランの国を人々の営みがほとんど残らないまでに破壊し、木々を切り、建物を壊し、水路や泉を埋めた。」(『イランの王者たちの歴史』)

さらにナヴァアーイーにおいて古代イラン世界は、後の時代のチュルク・モンゴル世界とあたかも直接につながっているかのようである。例えば『篤信家たちの驚嘆』第四八章(第一四の講話)で著者は、天輪のめぐりを嘆きつつ、伝説上・歴史上の王たちを列挙して次のように言う。

「時の王であつた者たちを、公正な統治者であつた者たちを、

(天輪は)一人として殺さずにおいただろうか、

哀れな惨めな姿に変えなかつただろうか？

見るがいい、ファリードゥーンやジャムシードは何処へ行った？

イラジ、フーシヤング、それにザッハークは？

サルム、マヌーチェフル、それにナウザルは何処に？

バフマン、ダリウス、イスカンダルは何処に？

世界の支配者チンギズ・ハーンは何処に？

世界のハーン、ティムール・キュレゲンは何処に？

卑しい天輪は誰一人に対しても誠実ではなかつた、

誰かを引き上げては、また落としたのであった。」

(HA, XLVIII 93-98)

ここではイランの伝説上のピーシユダーディー朝の諸王、ダリウス(アケメネス朝ペルシア)やアレキサンダーといった歴史時代の王たちから、近い過去の存在であるモンゴルのチンギズ・ハーン、現王朝ティムール朝の開祖ティムールに至るまでが一つの自然な流れとして提示されている。これと似た立場は、『ファルハードとシーリーン』第五章、王子シャー・ガリーブへの訓戒の中で、イスカンダルやウルグ・ベグの事蹟に触れた後「タフムーラス、ジャムシード、ザッハークは何処に?」と述べるところ(ES, LIII-55)にも認められる。また『宝石の一聯』に見られる「カユーマルスやジャムシードの時代から現在に至るまで」(MAT 15, p.131)という表現にも同じ発想が読み取れるであろう。もちろん、ナヴァーイーがチュルクの独自の起源というものを考えていなかった訳ではない。『二つの言語の裁定』には、チュルクがヌーフ(ノア)の子ヤフェス(ヤペテ)の子孫であるという見解が述べられている(ML, p.168)。しかしここで見たような表現からは、イランの歴史とチュルクの歴史とは、二つの別々の歴史というよりはむしろ一本の流れとして捉えられていたことが窺われるのである。すなわち、イラン古代の(伝説上を含む)王たちに由来する伝統はもはや「外来の」ものではなく自分たちの伝統となっていたのである。かつてはチュルクの支配者と同一視されていたアフラーシヤーブが「破壊者」として扱われていることはそのよい証拠である。そしてこのような伝統意識を持つ以上、文学作品の題材がその中から選ばれるのは当然のことであった。

2・4 ペルシア文学とチャガタイ文学

かつて筆者は、ナヴァーイーらチャガタイ文学の文人たちにとって重要であったのは、過去のチュルク語文学の伝統ではなくペルシア文学のそれであったことを示した(菅原 1998: 129-130)。言い換えれば、彼らにとって文学史とはペルシア文学の歴史に他ならなかったのである。このような態度は、上で見た歴史一般に対するナヴァーイーの捉え方とも符合するものと言えるであろう。実際ナヴァーイーは『二つの言語の裁定』において、文学の発展が歴史の流れと並行するものであるという見方を提示している。すなわち、アラブ支配の時代においてはアラビア語文学が栄えたが、イラン系支配者の登場によりペルシア語文学が発展したことを指摘した後、次のように続けているのである。

「王権がアラブやペルシアのスルターンたちからチュルクのハーンたちに移行し、フラグ・ハーンの時代から幸福な二星の結合であるスルターン・ティムール・キュレゲンの時代に至るまで、言及するほどの、あるいは紙に書かれるほどの作品を著したチュルク語詩人は出なかった。またスルターンたちからも人前で読まれうるような作品は伝わっていない。一方、幸福な二星の結合であるスルターン・ティムール・キュレゲンの時代からその継嗣シャー・ルフ・スルターンの時代の末までには、チュルク語詩人たちが登場し、陛下の子供・子孫たちからも詩才あるスルターンたちが輩出した。」

文学の発展についてのこのような考え方をナヴァーイーがどこから得たのかは明らかでない。しかしながら、この考え方を前節で指摘した歴史に対する見方と重ね合わせるならば、ナヴァーイーにとつてのチュルク文学(チャガタイ文学)とペルシア文学との関係は明瞭である。すなわち、チュルク文学はペルシア文学と対立する別個の存在ではなく、いわば一つの流れの中にあるものとして、言語の違いを超えて同じ伝統を受け継ぐものであった。それゆえナヴァーイーにとつてペルシア文学とは、単に形式上のモデルや題材を提供する存在にとどまるものではなかった。むしろ自らの文学活動をペルシア文学の伝統に直接つながるものとし、自らをペルシア文学の歴史の中に位置付けていたのである。このようなペルシア文学への強い志向は、ナヴァーイーの作品から容易に読み取れるものである。その一例として、五部作の最後の作品である『イスカンダルの城壁』の最後の場面を挙げることができる。五部作を完成させたナヴァーイーは、ジャーミーの導きにより不思議な光景を見る。アミール・ホスロウ、ニザーミー、フェルドウスィー、サアデーといった偉大なペルシア語詩人たちが登場し、ナヴァーイーと対面するのである。

「ジャーミーとホスロウが私の両手を取り、ニザーミーの方へと導く。

【中略】

シャイフ(ニザーミー)と対面するや、貴いその足元にひざまづく。あふれる涙の中で地面に口づけすれば、九天もこれに羨望する。

恩寵の手により地面から頭を上げると、導きの道が私に示される。」

この場面において、「五部作」の伝統の創始者であるニザーミーを理想とし、アミール・ホスロウやジャーミーの助けによりその理想を目指すナヴァーイーの姿が描かれていることは明白である。ナヴァーイーにとつて、五部作の完成こそは自らがニザーミー以来の伝統の継承者であることを示すものに他ならなかったのである。

3 結び

本稿では、イスラーム時代チュルク語文学の初期の作品である『クトドゥグ・ビリグ』と、チャガタイ文学を代表する詩人アリー・シール・ナヴァーイーの作品とを取り上げ、それぞれにおけるチュルク的要素とイラン的要素との関係を検討した。その結果、前者においては伝統的なチュルク的要素と、外来のイラン的・イスラーム的要素との興味深い融合が認められるのに対して、後者においてはイラン的要素がチュルク的要素を完全に圧倒していると言って差し支えない。言い換えれば、十一世紀から十五世紀までの間にチュルク語文学の「イラン化」が進展した結果、かつては利用されていた形式・題材面でのチュルク的な要素がもはや顧みられなくなっていた。その反対に、ペルシア文学に由来するイラン的な要素は既に外来のものとは見なされなくなっていたのである。この「イラン化」の過程を解明することはまた別の興味深い課題である。その際に、ナ

ヴァアラー以前におけるペルシア語からの翻訳・翻案作品の研究が重要な意味を持つことは言うまでもない。

それでは、本稿の考察が示す、自らをペルシア文学の歴史の中に位置付けていたというナヴァアラー像は、従来の一般的なこの詩人の像とどのように整合するのであるか。ナヴァアラーが「チュルク語による文学の確立」ということを自らの使命と考えていたことはその作品の中でも繰り返し述べられている。

「ペルシア語で詩が詠まれるならば、その言語を理解する者が楽しみを得る。」

私はチュルク語で語りを始め、この言い伝えを物語として述べた。その評判が世に広まれば、チュルクの人々にも益するところがあるうと考えて。」

『ライラーとマジヌーン』(LM 3595-3597)

「チュルク語詩の旗を掲げつつ、私はこの王国を統一した。」

四つの詩集に五つの宝（五部作）は、苦もなく仕上げられた。」

『鳥の言葉』(LT 3500-3501)

「軍を率いることなく、中国からホラーサーンまで私はやすやすと命令に従えた。」

ホラーサーンは言うに及ばず、シーラーズにもタブリーズにも、私の筆の葦は砂糖をまき散らした。

チュルク人は私の言葉に心も魂も奪われた。

チュルク人のみならずトルクメン人までも、

国の内に勅令（ファルマーン）を送るのではなく、

詩集（ディーヴァーン）を送ることで統治したのである。」

『ファルハートとシーリーン』(FS LTv 93-96)

しかしこのような主張を今日のわれわれの視点からではなく、当時の文脈の中で理解する試みはいまだ十分になされているとは言いがたい。例えば十五世紀の中央アジアにおいて、文学の受け手は自らの言語というものに対してどの程度まで自覚的であったのだろうか。この問題は当時の言語状況、特に多言語使用の状況との関連において解明される必要があることは言うまでもない。そしてそのような取り組みを経た上で、この偉大な詩人において「文学作品」、作品に題材を提供するものとしての「歴史・伝承」、および作品の媒体としての「言語」の三者がどのような関係にあったのか、改めて検討されるべきであると考える。

註

1 短長長短長長短長短長の十一音節で半句が構成され、二つの半句からなる対句が意味的なまとまりの単位となる。一つの対句を構成する半句同士は末尾で押韻する（本文参照）。なお「クダードゥグ・ピリグ」においてペルシア詩の韻律論（*aruz*）がどのように適用されているかについてはいくつかの見解がある。詳細は Doerfer (1992) を参照。

2 3801-3802 では韻律さえも異なっている（半句＝十二音節）。

3 引用はアラト校訂本に基づくが、転写を簡略化した。なお *Beitz*（アラト校訂本は *aruz*）については *Rbg*, p.659 を参照。

4 *a a b a* 型の押韻による四行詩については Doerfer (1994) に興味深い議論がある。

る。

5 「オテユケン山」は古代の突厥にとって「聖なる山」であった。

6 少なくともそのように受け取られることを著者は想定していただろう。なおタンコフはこれらの引用が実際には全て著者ユースフの自作であると推定している (Dankeoff 1983:9-10)。

7 'Judging from the large number of Persian calques in the language of Kutadg Bilig (...), it is probable that its immediate model was a Persian mirror for princes.' (Dankeoff 1983:8)

8 作品の思想面での、伝統的な要素と新しい外来の要素との関係についてはDankeoff (1983, Introduction)に当時の時代背景と関連付けた詳しい考察が見られる。

9 引用部分の最後は原文 'bu Afasiyah mitu ellar talap' であるが、タンコフはこの ellar 「くにくに」を 'their realm' と訳し、アフラーシヤーフによるイラン支配のことが述べられていると解釈している。

10 DLIT, tongaの項(605)を見よ。また同じくxanの項(513)には、xanの称号で呼ばれるのはアフラーシヤーフの子孫であるという記述が見られる。

11 ナヴァアーイーが仕えていたスルターン・フサインのヘラート宮廷について、特にそこでの《テュルク・モンゴルの》要素と《イラン・イスラーム的》要素との関係については久保(1997)を参照。

12 ナヴァアーイーのチャガタイ語作品の全体はEckmann (1964:331-357), Levand (1965, 1968)などで概観されている。なおナヴァアーイーはヘルシア語でも作品を書きつづけて、「二つの言語の裁定」にはヘルシア語による頌詩や詩集についての記述が見られる(ML, pp.181-186)。

13 アミール・ホスロウの詩集は「青春の贈り物」、「人生の最中」、「完璧の光」、「清浄な残り」、「完璧の終わり」の五部からなる。ナヴァアーイーがアミール・ホスロウを範としたことは詩集の序文(MAT 3, pp.14-19)を「驚きの五部」(MAT 15, pp.68-70)の中で述べられている。直接のきっかけは前者によれば主君スルターン・フサイン

の、後者によればジャーミーのそれぞれ勧めであったという。なおこのような構成と、各詩集に収められた作品が実際に書かれた年代とが必ずしも対応していないことはBeyrenic (1965:457-458)やEckmann (1970)によって明らかにされている。

14 この同じ詩は初期の詩集である「初めの驚き」の冒頭にもおかれていた。

15 cf. 菅原(1998:125-126)。

16 著者晩年の大作である二四は「サアディーの『薔薇園』やジャーミーの『春の園』をモデルにしている」という指摘があるが(Subtelny 1993:91)、作品の序文及び跋文にそのことへの言及は見られない。この作品についてはさらに詳しい検討が必要である。

17 cf. 菅原(1998:124-125)。

18 「フクフイーヤ」の性格に関してはSubtelny(1991)で議論されている。

19 ただし作品中で自作として名前が挙げられているものの、今日現存しない『歴史の精髓』Zubdat al-lawanix という作品がチュルク・モンゴル史であった可能性が従来から指摘されている。この問題についての最近の重要な研究にAbik (1999)がある。

20 成立時期は「イस्कンダルの鏡」(二二九九年)が「八つの天国」(二二〇一年)に先行する (Türkmen 1989:39)。

21 Beyrenic (1928, 1965 特に pp.434-440), Bertels (1957) 等。

22 ヘルテリスは「フイラーとマジジュン」を第二作、「ファルハードとシーリーン」を第三作とするが(Beyrenic 1965:139, 145)「イस्कンダルの城壁」(MAT 11, pp.56-567)や「二つの言語の裁定」(ML, p.181)においてナヴァアーイーは「ファルハードとシーリーン」を五部作の中で二番目に挙げており、ヘルテリスの見解には従い難い。

- 23 cf. *Beprrensic* (1965:149); *FŠ*, pp.32-37.
- 24 さらに指摘するならば、「ファルハードとシーリーン」第二十八章では、「ハーカーン」たちの乗った船が海上で嵐に遭った後、偶然「中国」にたどり着く。漂着先として東トルキスタンを考えるのはいささか不自然であろう(一)。
- 25 cf. *Beprrensic* (1965: 324-325, 339-341)。
- 26 「七つの遊星」と「鳥の言葉」はいわゆる枠物語である。「篤信家たちの驚嘆」はまとまった筋をもたず、主として道徳的なテーマに関する二〇の「講話」とそれらを説明するための「挿話」とからなっている。さらに「イスカンダルの城壁」は「講話」、「挿話」、「問答」が枠を構成するイスカンダルの物語の中に組み入れられた複雑な構成によっている。一方「ファルハードとシーリーン」と「ライラーとマジジュヌーン」は通常の物語詩の形式をとっており、挿話を含まない。
- 27 さらに挿話の中には、特定の歴史上・伝説上の人物と結びつかないものや、動物を主人公とする寓話も見られる。
- 28 ナヴァーイーの作品ではこの他に「名士たちの集い」第七部がティムールほか歴代のティムール朝君主の文学との関わりで紹介にあてられている。
- 29 マフムード・アル・カーシニガリーやバーブルによる言及がその代表的な例である。
- 30 ホラーサーンが第四気候帯に位置することを指している。
- 31 「イスカンダルの城壁」二七章、イスカンダルとイランのダリウスの率いる軍との対戦の場面で「ウスベク」や「モグル」や「カルマク」がダリウス側で参戦したことが描かれている(MAT 11, p.170)のも、現在のことがらが歴史物語の中に投影された例と『*Beprrensic*』(cf. *Beprrensic* 1965: 393, *Botovkov* 1954: 74°
- 32 MAT 11, p.594での引用による。なお「イスカンダルの城壁」においてマフラー・スィヤープは破壊者とされている(同p.77)。

- 33 これに対してベルシア人はサーム(セム)の子孫とされている。
- 34 この場面に關しては *Beprrensic* (1965: 375-379)に独自の解釈が見られるが、この点ではこの問題に立ち入らない。
- 35 代表的なものとして、サイファイ・サライーによる『薔薇園』(サアデー原作)、クトゥップによる『ホスロウとシーリーン』(ニザーシー原作)、訳者不詳の『聖者列伝』(アッタール原作)がある。
- 36 従来の「民族の詩人」というナヴァーイー像は、「二つの言語の裁定」に見られるチュルク語とペルシア語との比較を一種のプロバガンダとして表面的に解釈することから生じた偏ったイメージによるところが大きいと言わざるを得ない。この点についてはかつて口頭発表で触れたことがある。「二つの言語の裁定」に關する覚え書き」(第三六回野尻湖クリルタイ 一九九九年七月)。
- 37 ティムール朝末期の社会における文学の状況を論じた最近の研究に久保(2002)がある。

BIBLIOGRAPHY

DLT: *Kāsgarī Mahmūd, Divānū lūgati'l-turk*. Turkbasim. Ankara 1990.

HA: Алишер Навоий, Хамса. *Хайрат-ул-абор*. Илмий танқидий матн. (рузуви: П.Шамсиев). Тошкент 1970.

FŠ: *Ali-šir Nevā'ī, Ferhād u Širin*. Inceleme - Metin. (hazirlayan: G. Alpay-Tekin) Ankara 1994.

LM: *Ali-šir Nevā'ī, Levī vü Mecrūn*. (hazirlayan: Ü.Çelik) Ankara 1996.

LT: *Ali šir Nevā'ī, Lisānū'l-ʿarab*. (hazirlayan: M.Сиродат) Анкара 1995.

MAT 3: Алишер Навоий, Хазойин ул-маоний. *Ғаройиб ус-сираф*. мухаммал асарлар тўплами 3. (нашрга таъйрловчи: Х.Сулаймон) Тошкент 1988.

MAT 10: Алишер Навоий, Хамса. *Сабъау Саёр*. мухаммал асарлар тўплами 10. (нашрга таъйрловчи: М.Мирзамажидова) Тошкент 1992.

MAT 11: Алишер Навоий, Хамса. *Сади Исқандарий*. мухаммал асарлар тўплами 11. (нашрга таъйрловчилар: М.Ҳамидова, Т.Ахмедов) Тошкент 1993.

- MAT 15 : Алишер Навоий, *Хамсат ул-мутаҳаййирин, Ҳолоти Саййид Ҳасан Ардашер, Ҳолоти Паҳлавон Муҳаммад, Назм ул-жавоҳир*. мукаммал асарлар тўплами 15. (нашрга тайёрловчи: С.Ғаниева) Тошкент 1999.
- ML : 'Ali Şir Nevâ'î, *Muhâkemetü'l-luğateyn*. İki Dilin Muhakemesi. (hazırlayan: F.S.Baruçtu Özönder) Ankara 1996.
- QB : R.R.Arat(ed.), *Kutadgu Bilig*. I Metin. Ankara 1947 (2nd ed. 1979).
- Rbg. : Al-Rabghūzī, *The Stories of the Prophets (Qışaş al-Anbiyā')*. An Eastern Turkish Version I. (ed. by H.E.Boeschoten, M.Vandamme and S.Tezcan) Leiden 1995.
- Abik, A.D.(1999)'Ali Şir Nevâ'î'nin Zübdetü't-tevârih'i üzerine' *Türk Dili Araştırmaları Yıllığı Belleten* 1996, pp.1-6.
- Arat, R.R.(tr.)(1959) Yusuf Has Hâcib, *Kutadgu Bilig*. II Çeviri. Ankara (5th ed. 1991).
- Bertels, E.E.(1957)'Ali Şir Neva'î'nin Ferhad ü Şirin'i' *Türk Dili Araştırmaları Yıllığı Belleten* 1957, pp.115-130.
- Бертельс, Е.Э.(1928)'Невâи и 'Attâr' in *Мир-Али-Шер. Сборник к пятидесятилетию со дня рождения*. Ленинград, pp.24-82.
- Бертельс, Е.Э. (1965) *Навои и Джамии*. Москва.
- Borovkov, A.K.(1954)'Özbek yazı dilinin kurucusu Ali Şir Neva'î' *Türk Dili Araştırmaları Yıllığı Belleten* 1954, pp.59-96.
- Dankoff, R.(tr.)(1983) Yüsf Khâşş Hâjib, *Wisdom of Royal Glory (Kutadgu Bilig)*. A *Turko-Islamic Mirror for Princes*. Chicago.
- Doerfer, G.(1992)'Zur karachanidischen Metrik' *Der Islam* 69, pp.313-324.
- Doerfer, G.(1994)'Gedanken zur Entstehung des *rubâ'î*' in L.Johanson and B.Utas(eds.), *Arabic Prosody and its Applications in Muslim Poetry*. Stockholm, pp.45-59.
- Eckmann, J.(1964)'Die tschaghataische Literatur' in *Philologiae Turcaicae Fundamenta* II. Wiesbaden, pp.304-402.
- Eckmann, J.(1970)'Neva'î'nin ilk divanları üzerine' *Türk Dili Araştırmaları Yıllığı Belleten* 1970, pp.253-269.
- Əlişer Navaij, *Хамса* (qisqartiv basмага tajjarlavci: S.Əjnij). Taşkent 1940.
- Ҳайитметов, А.(1991)'Алишер Навоий и жодининг манбалари' *Ўзбек Тили ва Адабиёти* 1991-1, pp.5-12.
- 久保一之(1997)'テイヤール朝とその後 —テイヤール朝の政府・宮廷と中央アジアの歴史—」『岩波講座 世界歴史11 中央ユーラシアの統合(9—16世紀)』pp.147-176.
- 久保一之(2001)「ひわゆめテイヤール朝ルネサンス期のペルシア語文化圏における都市と識字学 —15世紀末ケニアートのシヤフル・アーシエーを中心として—」『西アジア研究』4 pp.54-83.
- 黒柳恒男(1977)『ペルシア文学史綱』 近藤出版社
- 黒柳恒男(1989)『ペルシアの神話 「王書」(シヤール・ナーフ) たち』 泰流社
- Levend, A.S.(1965,1966,1967,1968) *Ali Şir Neva'î I-IV*. Ankara.
- 岡野英一(2001)「ペルシアとその文化(ペルシア・ナーフの研究4 研究稿)」『岩波講座 世界歴史11 中央ユーラシアの統合(9—16世紀)』pp.121-138.
- Стеблева, И.В.(1971) *Развитие Тюркских Поэтических Форм в XI Веке*. Москва.
- Subtelny, M.E.(1991)'The *Yaqfiya* of Mir 'Ali Şir Navā'î as apologia' *Journal of Turkish Studies* 15, pp.257-286.
- Subtelny, M.E.(1993) 'Mir 'Ali Shir Nawā'î' in *The Encyclopedia of Islam (New Edition)* Vol. VII, pp.90-93.
- 菅原健(1998)「シャカター・トルコ語の成立と文学的伝統」『神戸市外国語大学外国語研究』pp.121-138.
- 菅原健(1999)「その後の世界 —民族の詩人—ハズクノ語(2)」『the Communicator』1999年1月号
- Tekin, T.(1986) 'Karahanlı dönemi Türk şiiri' *Türk Dili* LI/409 Türk Şiiri Özel Sayısı I(Eski Türk Şiiri), pp.81-157.
- Türkmen, E.(1989) *Emir Hüsrev-i Dihlevi'nin Hayatı, Eserleri ve Edebî Şahsiyeti*. Ankara.
- Валитова, А.А.(1958) 'К вопросу о фольклорных мотивах в поэме «Кутадгу Билиг»' *Советское Востоковедение* 1958-5, pp.88-102.